

## 現地通信

### バンコック便り

相良 惟一

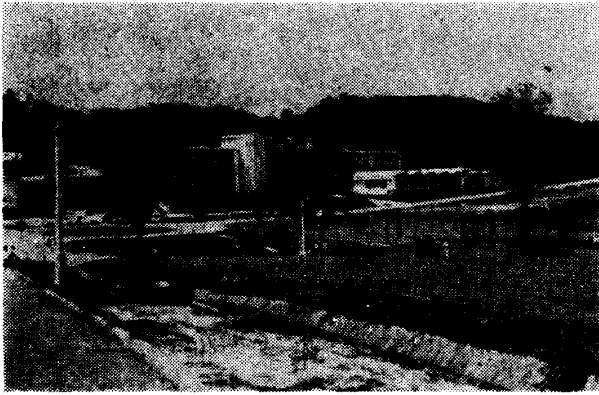
当地の雨期は、例年いちおう六月一日に始まるということになっており、これは偶然わたしの当地への赴任の時期と一致したわけである。しかし、どうしたものか、今年は雨は少なく、また本格的な雨期にはいったとはいえないようで、予想していた「雨期来たる」というような豪壮な雨にはまだお目にかからない。このことは、ちよっと物足りない感じがしないでもない。しかし、フィールドで調査研究に従事する人たちにとって、どちらかといえばこれはありがたいことなので、あまり文句をいえた義理ではなからう。

いずれにせよ、北緯十三度半、しかもタイ湾の奥深く位置する当バンコック市の温度、湿度は相当なもので、夜中に必ず一度は汗で眼がさめ、とめていたクーラーを動かす。そして朝起きれば、空はあいかわらず濃紺色にクッキリと晴れわたり、今日の日中の暑さをしのばせる。戦前、わが国の外交官のあいだでは、任地に「三シャを避ける」という言い伝えがあり、タイの旧名、シャムは、ペルシャ、ギリシャ(?)とともに、任地として最も望ましくないところとされていたそうである。しかし東京をしのぐ国際都市バンコックは、今は衛生施設も昔と比較にならぬくらい整備してきている。それで、わたしたち、タイにいる連中も、みな健康に恵まれ、元気で活躍していることを、まず最初におことわりしておこう。

六、七月の両月、人を迎え、人を送り、あたかも、自分は宿屋のおやじのごとき実感をもったのである。なお、タイ側の各官庁、ユネスコ、エカフェなどの国際機関との接衝など、かなり眼まぐるしいことであった。しかし、それは歎くにあたらぬ。なぜならば、そのような機能をはたすことこそ、この連絡事務所本来の存在理由なのであるから。それに、ここは遠

くフィールドに出かけて、調査研究に従事する人びとの基地的な意義をもちかね備えているのである。生活条件のまったく異なる現場で、しかも長期間、孤独な生活をおくる若い人たちにとって、この事務所は、時おり立ち戻って、つかれをいやし、次の活動のための英気を養う休養の場所でもあるのだ。長い間、日本人の姿に接せず、いわんや日本語を一言も耳にしないようなへき遠の地から久しぶりにここにかえって来て、わたしの家内に、あたかも母親にたいしてのように甘えるわたしたちの若い仲間の姿は、ほほえましいものがある。

バンコックのように、日本人の強力なコミュニティーの存在するところにあつては、われわれは、フランス人のいうところのデパイズマン——「異国にある思い」とでもいおうか——を感じる事が少ない。町を歩く日本人の姿はそれほどにも多く、また日本製品の看板はいたるところではでに眼につく。何よりも、ありがたいことは、われわれにたいする当地の人びとの親近感である。聞けば、戦争中、日本軍は進駐していたものの、ほとんど一般民衆に迷惑をかけることがなく、それ故、日本にたいする悪い思い出がないという。島津大使の説によると、この国と日本との唯一の懸案問題は、タイ国側のいちじるしい入超であり、このアンバランスの是正ということをしきりにタイ国政府が要求しているそうである。今や邦人の大挙進出は過当競争をさえうみだし、タイ国側にもあまりよい心象を与えていないともいわれる。日本人は、金もうけのために多勢押しかけてきているが、こういうときに京都大学はよいことをやっている。われわれのこの連絡事務所の設置や、タイにおける調査研究計画について、このようにいう者が、少なくないことは、われわ



マ ラ ヤ 大 学

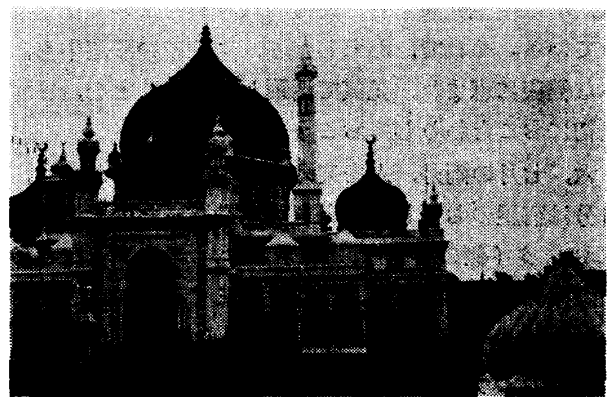
れが知っておいていいことであり、またそれだけわれわれの責任は重大である。

実は、上のようなことを、まっさきにわたしに述べたのは、おなじみの陳さんなのである。この人は、数年前、不治の眼病を医学部の浅山教授によって治療された100パーセントの親日家であり、わが連絡事務所設立について忘れることのできない恩人である。もともと祖父の時代、中国本土の福建省にいたときから、かれの代まで三代つづいてのまれにみる親日家なのである。かれは本年二月事務所設置以来、事務所の事実上の相談役の立場にいるわけであるが、このたびわたしの赴任を機とし、京大のセンターの指示をも仰ぎ、七月六日づけて、当事務所かぎりの顧問に委嘱したのである。かれは、口を開くと、自分の眼は、京大によって得られた眼であり、キョウダイ・アイだという。キョウダイ・アイは京大愛にも通じ、兄弟愛ともとれる。とにかく京大愛に燃えている陳氏は、ますます、京大のわれわれの事業のために尽力を惜しまないであろうことは、絶対に間違いのないところである。

なお、このオフィスといわず、われわれの事業計画に絶大な支援協力を惜しまない、もうひとりの有力なタイ側の人がある。先般、京大を訪問したネート將軍がその人である。彼は総理府官房長官が本職であるが、タイ国国家研究会議の事務総長でもある。きわめて多忙なかれではあるが、何ごとでも持ちこめば、こころよく相談にのり、そしてただちに適切な措置をとってくれる。今春、訪日のさい同行した夫人も、將軍に劣らぬ日本びいきであり、このごろ、口ぐせのように、来年オリンピックさわぎのすっきり済んだのち、再度夫君とともに訪日したいといっている。わた

しの着任以来、この一家といわば親戚づきあいが始まり、あまり度々夫人からのお呼出しにあずかるので、家内など嬉しい悲鳴をあげているこの頃である。私的な家どおしの交際はさておき、この国のようにナショナルリズムの旺盛なところにあつては、政府側機関の理解と協力がなければ、この国における調査研究は外国人にとって不可能にひとしいといわなければならない。こういう際に、ネート一家が心からの好意を示してくれることは、どれほど意義がふかいか想像にまかせたい。

ネート大将を長にいただく国家研究会議はわれわれといろいろな点で最も関係の深い官庁であり、そこで常に程々の便宜を与えられているのであるが、この役所にはなおまた、二三の親しい人びとがいる。今春、ネート夫妻に同行したニッポン氏はかつてこの社会科学部長であったが、現在は総理府の他の要職に転じ名目上かれのポストがなおここに残されているとかいう。また、社会科学部の課長にストレー女史がいる。女史の夫君チョート君は、九大農学部出身、かつて、わたしが講師に名をつらねていた民主教育協会の留学生セミナー以来の顔なじみで、現在かれはタイ国農林省の農蚕関係の若手の職員で、前途をしょく目されている。ストレー女史は、旦那さんじこみの片言の日本語で応接してくれる。その下の係長のウドムさんは東大経済学部出身の才媛、「あなたは東大で脇村ギ太郎先生に習われたそうですね」などという、「脇村ヨシ太郎先生に習いました」と切りかえされる。なおまた、その下にいるクレオマスさんもお茶の水女子大学家政科出身。映画俳優の岩下志摩そっくりだそうで、誰やら以前このオフィスにいた人が志摩



モ ス ク

ちゃんという愛称をつけた。この志摩ちゃんに、「あなたは日本の娘さんそっくりですね」といったら「ことばの点を除いてはね」とおっしゃる。これから、当地に来るおのこの面々に伝えておくが、タイの女性にたいする殺し文句は、日本女性そっくりだということだそうである。もっとも、このことは、小生はこの頃になって知ったことだということを一言つけ加えておきたい。

六、七の両月、当オフィスを訪問したおもな人々について述べることにしよう。

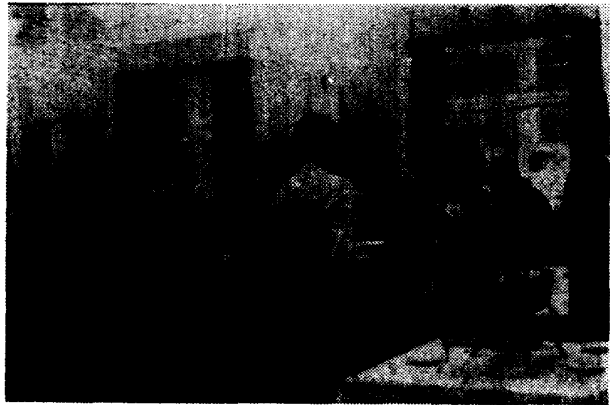
まず、挨拶がてら訪問した人としては、アメリカ、インディアナ大学のサットン氏、同シラキューズ大学のゴールデン・ボールズ氏、タイ南部で研究中のコーネル大学のローリントン・シャープ氏などである。

つぎに、当オフィスに短期間滞在し、調査研究をおこなった人びとには、以下のような顔ぶれが見られる。(敬称は省略する)。

日付け順によると、南勲農学部助教授が6月29日より約2週間滞在し、その間チャイナット、ヤンヒーの両ダムを視察し、タイ国における灌漑水利の問題、とくにチャオ・プラヤ河(メナム河)の水理特性に関し、タイ側官庁と密接な連絡をとりつつ、調査をおこなった。

また、鎌倉昇経済学部助教授は、東南アジア諸国における経済問題の予備調査のため7月6日より当オフィスに滞在、その間ビルマのラングーン、南ベトナムのサイゴンにおもむき、あるいはタイ南部ソクラー地方において視察をおこない、あるいは当地においてエカフェなどと種々接衝をおこなった。

なお、中田淳一法学部長は7月18日、シンガポール



カクテルパーティにて

において開催されたアジア法学教育会議参加のため、当オフィスに立ちより、さらに7月28日、再度バンコックを訪問し、8月2日まで滞在した。その間、タイ国の司法制度などについて調査し、サンヤ最高裁判所長官、プラヤー・アタカリ法務大臣兼タマサット大学法学部長ほか数名のタイ国法学界の首脳部と面接し、意見を交換した。なお、当オフィスにおいては、中田法学部長の来訪を機として、小生夫妻、陳顧問夫妻の主催のもとに、ロイヤル・スポーツ・クラブにおいてカクテル・パーティーを7月31日夜催した。ネート大将夫妻、喜多村エカフェ調査部長夫妻、ザグロフスキー・ユネスコ地域事務所長夫妻などタイ側はもちろん、当地の内外人約130名の来会者があり、きわめて盛大な会をもつことができた。

また、8月4日、オーストラリアにおける学会出席の帰途、岩村忍東南アジア研究センター所長が当オフィスを訪問、ネート氏、ニッポン氏等と京大研究センターの今後の調査研究事業の促進、タイ側との協力の問題などについて隔意のない意見を交換した。

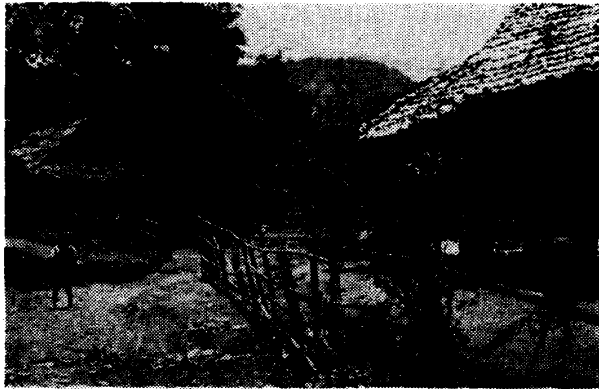


次に、現地における各種の調査研究事業の現在の進行状況について簡単に述べることにしたい。

まず、飯島茂農学部助手は、タイ国の北部山岳地帯一帯に居住する山地住民のうち、とくに多数を占めるカレン族を調査するため、6月中旬、タイの北部の要地チェンマイにおもむいた。そして、同地において準備を重ね、同地を基地として、メ・サリエン地方のメ・ハン附近におけるカレン族の調査をさしあたり行なうことになっている。カレン族を調査対象にえらんだ理由は、これについての研究は従来あまり見るべきもの



叢の中にカレン人の家が見える



カレン人の部落

がないことと、もうひとつには、タイ国内務省からも、行政上の必要から、カレン族について研究をつよく要望されたからである。飯島助手は、とりわけカレン族のタイ化の過程を研究することを意図している。具体的には、11月の雨期あけまでに、比較的に接触しやすい水田農業に従事する低地カレン族の調査をおこない、さらにその後山地に居住する焼畑農業のカレン族の調査を進める計画である。

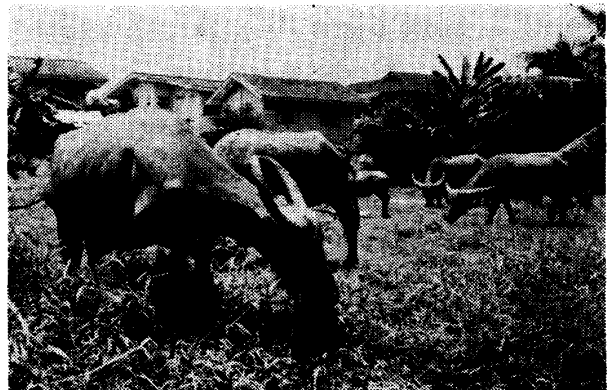
東南アジアにおける村落社会の変動過程の比較研究を行なおうとする水野浩一は、6月中旬、タイ国東北部のコンケン、ポーンの両都市におもむき、現在コンケン周辺の村落における調査をなすべくコンケンに滞在中である。水野はとくに、村落の位置、世帯数と人口、雨期、乾期の交通状態、バス・オートバイ・自転車などの利用度、ラジオと新聞などのマスコミュニケーションの状態、市場の位道と売買、出稼ぎ、通勤、米、ジュート、野菜類の作付面積、平均所有反別、家畜、織製品、寺と学校の社会圏など種々の問題について詳細な調査を行なうはずである。

矢野暢は、タイ国南部地方の調査を担当しつつあり、ソンクラール県以北のタイ人社会の理解を主たる目標とし、ソンクラールに滞在し、6月初旬より正式の調査を開始することになっている。ソンクラールはタイ南部のあらゆる特色をそなえ、学術的に見ても、きわめて興味深い地域であるといわれる。すなわち、東は海に接し、そこには多くの漁村がある。また、南はマレーシアと国境を接し、数多くのマラヤ人部落が点在する。また、ゴムのプランテーションも多く見られ、これはタイ人が経営する特異な存在である。なおまた、この地方の一つの中心地であるハジャイ周辺の経済圏

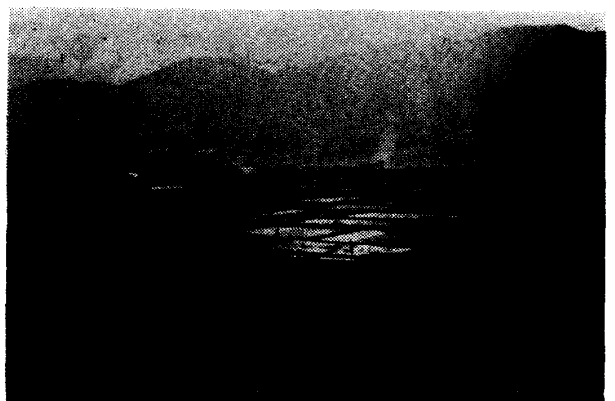
は、タイ人社会に珍しいほどダイナミックな活気にみちたものである。そこで、ハジャイを中心とする通商圏のうち、タイ人とイスラム部落すなわちマラヤ人部落のいりまじって存在する地域であるところのこの地域で、近代化の誘因にたいする反応の差、あるいは部落間の関係などにつき、つぶさに実情を調査する計画をもっている。とくに、ハジャイの北東15キロの地点にあるドンキレク部落（イスラム部落）とそれに隣接するボラクム部落（仏教）の2地点に、焦点をしばり、そこに定住して調査を行なうはずである。

福井捷朗は、現在バンコックにあるカセツァート大学に聴講生として在学中である。同大学はタイ国随一の農業大学であり、農林畜水産を中心とする6学部より成立っている。福井はこの大学において、タイ語の習得と多雨熱帯の水田土壌の研究を主として行なうことになっている。

桂満希郎は、同じくタイ国の名門チュラロンコーン大学の文学部タイ語学科に聴講生として入学し、現在タイ語の習熟につとめている。桂は、そのほか、北部



水牛



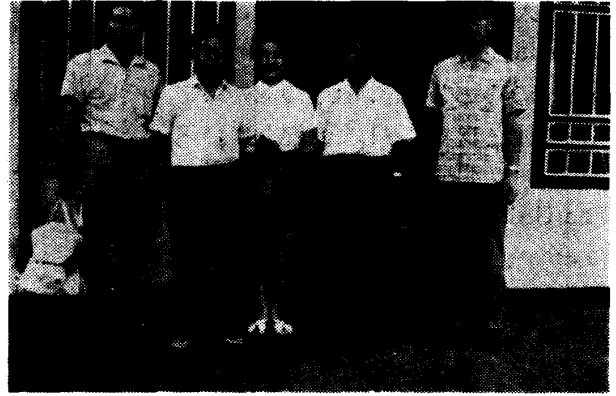
水田

タイで話されているチベット・ビルマ系諸言語についてのデータの収集に従事する予定である。

以上の若い研究員たちは、いずれも自己の研究テーマについて、意欲的にとりくんでおり、将来相当の研究成果をあげることが期待されている。

相良惟一は、研究テーマとして東南アジアにおける教育構造の比較研究という問題を持っている。幸いにして、バンコックには、ユネスコのアジア地域の教育振興のプランをねっている地域事務所があるので、それと密接な連絡をとりつつ、研究を進めている。なお、それにかんするタイ国文部省やユネスコ国内委員会の協力をも得ている。なお、現在は、タイ国における宗教と教育との関係、あるいはタイにおける仏教やキリスト教がこの国における教育発展のためどのような役割をはたしているかということについて調査をすすめている。なお、相良はバンコック連絡事務所の用務を遂行しているほか、各地に散在する研究員と連絡のため、まずチェンマイにおもむいた。そして、上述のように、同地で予備調査に従事しつつある飯島茂と連絡をとったほか、同地附近に居住する山地住民メウ人、カレン人の二つの部落におもむき、これらの住民のタイ化について教育がどのような役割をはたしているかについても調査をおこなった。

最後に、マレーシアにおける京大東南アジア研究センターの部員による調査研究について一言する。6月初旬、棚瀬襄爾文学部助教授、吉田光邦人文科学研究所



マレーシア、アロール・スターにて

助教授は、バンコックを経て、クアラルンプールにおもむいたが、現在は、マレーシア北部のケダ州の要地、アロール・スターにいちおう基地を設け、さらにそこから十数キロ離れたアロール・ジャングス部落において、前記棚瀬助教授が、口羽益生、坪内良博の二人とともに、調査を行ないつつある。他方、前田成文は、クアラルンプールにあるマラヤ大学文学部に入学し、マラヤ語の習熟につとめつつある。七月下旬、相良惟一は、マレーシアにおもむき、マラヤ大学、マレーシア文部省を訪問したほか、アロール・スターに棚瀬助教授の一行をおとずれ、事務連絡を行なうところがあった。

(東南アジア研究センター、バンコック連絡事務所にて)

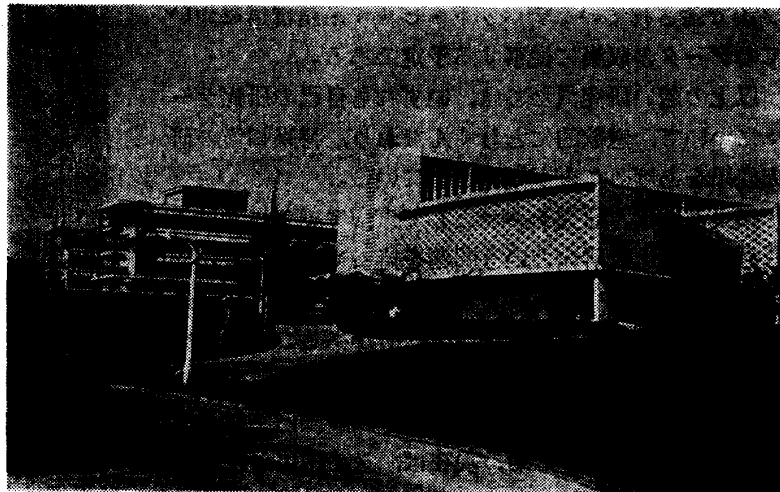
## マラヤ大学から

前田成文

マラヤ大学はおよそ 650 エーカーの谷・丘・湖のある土地をクアラ・ルンプールの西南に有している。ここにポツンポツンと近代的で斬新な建物が舗装された道路の傍に結び目のように続いている。林やしげみ他には、ほとんど植樹がされていないので若干淋しい気もするが、芝生が一面にうえられて良く手入れされている。

マラヤ連邦が独立国となった1957年に、シンガポールのマラヤ大学の分校として、クアラ・ルンプールに人文学部の1年生が、Technical Collegeの一隅をかりて学び、翌年に現在の大学の位置する Pantai Valley に工学部の建物が新設されて、100人の工学部学生を収容した。1959年シンガポールが自治領として成立するのに伴い、クアラ・ルンプールにマラヤ連邦

唯一の大学として、The University of Malaya in Kuala Lumpur の名のもとに、人文、工学、理学の3学部をもって独立の大学として出発した。同時にシンガポールの古いマラヤ大学も The University of Malaya in Singapore とされた。1961年には、両者をマラヤ大学、シンガポール大学と各々呼ぶことになった。マラヤ大学はその独立後急速な発展をとげ、上記の外に、農学、医学、教育学（1年間の Diploma コース）を加えて、マレーシアの教育の中心になりつつある。



文学部と教育学部の建物

第2表によると、学生の60%が中国

第1表 クアラ・ルンプールにおける学部別学生数の増加

年 度	人文学部	工学部	理学部	農学部	医学部	教育学部	計
1957	256						256
1958		100					100
1959	163	129	31				323
1960	354	159	114	27			654
1961	556	198	203	53			1010
1962	838	246	346	79			1509
1963	908	257	398	99	40	34	1736
1964	1148	308	431	101	109	86	2183

(注) 本年度の数字は確定的なものではなく、最終的には2300人前後の学生数であるという。

第2表 人種別学部別学生数

	文学部		工学部		理学部		農学部		医学部		教育学部		計		総計	%
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
マレー人	242	68	2	—	16	2	10	1	7	—	4	6	281	77	358	20.62
中国人	219	181	221	—	240	62	72	4	24	4	5	10	781	261	1042	60.02
インド人	82	45	21	—	35	12	10	—	4	—	2	—	154	57	211	12.16
セイロン人	12	2	4	—	4	2	—	—	—	1	—	1	43	32	75	4.32
ユーラシアン	9	9	1	—	4	1	—	—	—	—	—	—	20	6	26	1.50
その他	17	22	8	—	14	6	2	—	—	—	2	4	14	10	24	1.38
計	581	327	257	—	313	85	94	5	35	5	13	21	1293	443	1736	100
	908		257		398		99		40		34					

(注) 1963年 Student Statistics による。

人で、マレー人は僅かに20%、インド系の学生が15.5%という数字を示している。マレーシア全体の人種別人口比率と比較して、マレー人学生の率が非常に少ないことが注目される。これは学生の出身地を考えてみても、各州の人口に比例した学生数ではなく、中国人・インド人の多い州、いかえれば「都市」の多くある州から沢山の学生がきている。参考までにシンガポール大学における人種別の学生数の比率を掲げておく。(第3表)

第3表 シンガポール大学人種別学生比率  
1962年度

人 種	比 率
中 国 人	78%
イ ン ド 人	12%
マ レ ー 人	4%
ユ ー ラ シ ア ン	1.7%
そ の 他	1.3%
計	100%=2166

学部別の学生の分布を見てみると、マレー人のう

第4表 1964/5年度クラス配偶表(人文学部)

	経 済	英 文	地 理	歴 史	イ ン ド	イ ス ラ ム	マ レ ー	数 学
第 2 学 年	35	20	61	52	1	5	39	3
第 3 学 年	53	17	32	46	5	5	28	2

(注) 第1学年では3学科を選択して学習し、成績の良いものが2, 3年で1学科を専攻して B. A. Honors Degree を得ることができる。本表は第2, 第3学年の1学科専攻学生数だけである。

ち、86.6%までは人文学部に学ぶという偏重を示している。人文学部は、中国研究、経済学、英文学、地理学、歴史学、インド(タミール語)研究、イスラム研究、言語学、マレー研究、数学の各学科から構成されている。このうち、中国、インド、マレー研究は、Cambridge School Certificate の各語学の試験の単位を取らねば入科できないことになっている。中国研

究を第2, 第3学年で専攻する学生が昨年、今年と零であるのに対し、マレー研究は88人も専攻している。インド研究は第2, 第3学年で8人の専攻者がある。学生の側から見ると、将来の就職に対して中国、インド研究はほとんど用をなさないが、マレー研究の場合は、たとえ第2, 第3学年で専門として学ばないでも、その単位をとっていること自体が、就職(ことに政府関係)に非常に有利になるそうである。本年度の第2, 第3学年の1学科専攻学生は第4表の通りである。マレー研究は、二人の中国人を除いて全部マレー人である。

マレー研究科は、昨年まで Roorink 教授が同学科を率いて、文学・言語・文化を中心とした総合的な教育を行っていたのを、今年度からは陣容も新しく、教授に S. Takdir Alisjahbana (インドネシア人)を擁して、J. J. Ras 講師を除いては、すべてマレー人の若手学者で講師陣をうめ、専攻コースも①文学、②言語、③文化、④総合の四つにはっきりと区分された。この学科の講義だけは、すべてマレー



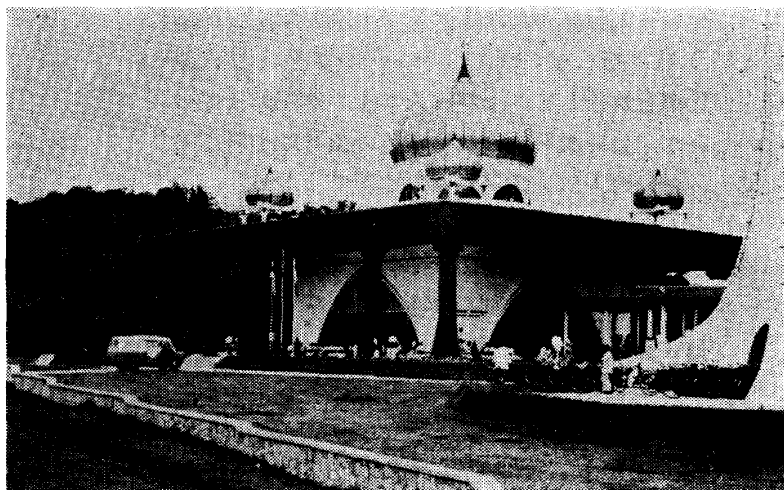
工学部と寮が中央から左半分に見える。

語でなされる。(その他は、中国研究、インド研究の若干の講義を除いて全学部とも英語が使用されている。)しかし率直に言って、とくに文化コースなどは、講師が英語からマレー語に翻訳した講義を、学生がもう一度英語の文献にあたって考えなおしてみるという状態である。しかし常にマレー人としての研究態度を意識的に保持しようとしており、学ぶべき点も多い。

教育媒体ということに関しては、マレーシアの国語化運動との関係が問題となる。本年も政府は5月24日から8月15日までを国語月間として巨額の金額を投じて、マレー語化を一般に普及しようとしている。大学でも、ささやかな試みではあるが、本年度から地理・歴史・経済などの講義を英語とマレー語の両方どちらでも聞けるようにしようとする案もある。このような2言語併用から徐々にマレー語に移行しようという案も、それを施行するのに相当の年数がかかりそうである。まず第一に講師陣の不足ということがある。それと関連して学生の側の理解の問題が加わってくる。現在のシステムでは英語能力だけが入学の基本条件となっているので、学生のなかには、マレー語を充分話せないものもあることはある。ともかく、大学教育のレベルでは、この数年間の内にマレー語講義が全学部で行なわれるとは到底考えられない。

マレー語化を1967年までに完全に施行することに対しては、マレー人の学生でも悲観的な見方をするものが多い。その上、国語化の期限がせまるにつれて、マレー人側のあせりと、中国人側の政治面における被圧迫感とがいよいよ激しくなっていくのではないかという見通しも、最近のブキット・ムルタジャムやシンガポールでのマレー人・中国人衝突事件を見ていると可能なように思われる。両者ともごくささいなことから、両人種グループの争いということにまで発展したのであるが、その背景には、もやもやとしたガスが常に渦巻いて存在しているように見える。

大学内では、英語をきずなとして学生は堅く結びついているように見えるが、各人種毎の断層は彼らの行動に、意識的ではないにしろ、あらわれてくる。たとえば大食堂で食事をするのに、マレー人学生と非マレ



大学モスク。金曜日には、学生や近所のイスラム教徒が大勢集まる。

一人学生とは、いつのまにか完全にわかれてしまっている。また、寮の部屋は二人共通なのであるが、マレー人、中国人とも同じ人種のものとは自由に行き来するが、相互の部屋を訪ねるということは少ない。また、二人のうち両方ともマレー人であると、片一方が他の人種の学生であるよりもずっと行き易いらしく、そのような部屋が、日常のたまり場ようになってくる。原因は単に人種の相違だけにあるのではないことは確かである。先に述べたように学部・学科毎にかなり人種別のかたよりのあることと、マレー人学生の方が、一つにはマレー語の講義を共通にしてその言語を使用していることも、第二に他の人種の学生に対する何らかの劣等感をもっていて、より sect 主義を発揮することにも原因がある。インド人・中国人の方が、マレー人よりも活発で社交的な感じをうけるが、女子生徒の場合、一番伝統的なのはインド人の女性のように見える。男子学生がほとんど洋服ズボンというスタイルに対して女子学生の方は各々母国の服装をすることが多いのもおもしろい。

マレーシアは、いわゆる複数社会といわれ、各セクターがそれぞれの文化の伝統を保持して、相互間に積極的な融合がみられない所に特徴があるといわれるが、大学という特種なコミュニティの中においてさえ、個々の文化的態度が無意識にあらわれてくる。極端に言えば、マレーシア独自の文化が育っていないともいえる。新しく希望にもえるマラヤ大学に総合文化創造の役割を期待したいものである。